

り 取たりや 関東一とぞ誉たり 股野いかって いか三郎 角

立て 打つれ立て帰りける

力は時の勝負也 然るに 汝 片手業は何事□やといふ 時に河津

### 付記

資料の閲覧、翻刻に際して御高配を賜った宮崎県立図書館に、  
厚く御礼申し上げます。

が言ふは さればとよ 前の二番は木の根 足角力のと色々の子細

有之故に 片手投に場中へなげたりといへば 股野□今は□も出ざ

りける 座中の若殿原一同笑ふ 五郎が負角力□ 思ひ哉 し

からば 笑ふ人誰々とも出給へ 一番□勝負□せんといふ 兄の

三郎おどり出て 景久勝負を可□ 是に有と 目に物みせんと

太力に手をかけ 鰐元をくつろげて立騒ぐ 座中すはやと喧嘩騒動

之時に 大兄の懷嶋権頭景義出て 舍弟兩人を制して□の□

□ 可持と制しける 土肥次郎も同じく出て 相互に座興なり 相

撲に論無し 古来より行司の裁判ひら□□□し給へと 双方酒宴に

成りけり 笑ひ諷ふて 何の論も無 日もはや西山に傾 黄暮時に

成り いざ□伊東之館へ帰りて休息□□や 面々と 大勢の面々引

召事なれ共 いざ参り□ふと被申ける 股野は是を聞て 珍しや

河津殿 相手に□はんと立向□海老名源三間に入 今日相

撲 結の関也と扇を入たり 双方大事の相撲なり 河津はさしかけ

て二つ三つ 突てみるに 思ふ程には曾てな□りける 祐泰思ふは

扱は今日の若殿原 酒の□皆負たりと見へたりと 心易く思

ひて 片手を脇へさしこんですらりと押込に 股野は足をふみとめ

かね 土俵の外へ出んとする 時に股野 組足を踏こたへたる所を

河津は開ひて前の方へ引たれば 土俵詰にてうつむけ□倒れける

座中一□に 扱も河津勝たり 見事に投たりと誉立たり 股野は大

きに腹を立 いやく□の相撲は俄の事故 足場大きにあしく

いま此所は木の根 岩出て 踏つまづきたり 今一番取べしと言時

に 兄の大場の三郎走り出て 爰に□此所に木の根有 尤さも

あるべしといへり 河津是を聞て打笑 俄に出たる木の根かない

か様□も 場所改て しづかに□□も 御望に仕べしと待合ける

股野下知して その辺の石を取り この根をほ□用意既に相調ひ

たり 時に海老名源三扇を入 股野はいらつて 指入て組所を 河

津は左の足を内の方へ差入るゝ<sup>内より</sup>□□<sup>河津かけといふ也</sup>て 見事

に投出したり また座中一同 小木の根□なきや 足場はいかに

股野殿の□言ふ 股野少しも□ぬ顔色にて いかによ河津 □□

なきや 足にて相撲は今がはじめて 重て足して稽古の其後 相撲

□腰かし□の相撲ならば 今一番取べしと言へり 河津は□ひ

心得たり 何□んなりとも御望次第立向ひ 海老名源三出 相撲三

番一つがい也 詰相撲重ては合すまじ 是切なりとて扇を入るゝ

時に河津 此度は何の手もなく 股野が下帯をつかんで引寄て 左

の方へ□廻して 目より高く差上て 暫たもつて片手をはなし 真

中に横投になげたりける 数千人の見物人 大声にて山も崩るゝ斗

立 我先にと踊りいでたり 股野大音にて 一方の□□は股野壱人

也 坂東の諸士并べや／＼ □□□の人を投たり 大□□のかけ

あをり むそう 高むそう 引廻し 首投 負投 頭□り 首そ□

矢倉 突落し すくい足 唯雷光のごとく 若殿原を十四五人まで

こそ投たりける 前後□つがい 廿七番□ぞ勝たりける □鬼神の

如く也 土肥次郎実平声をあげて □□□立／＼ 扱もすぐれたる

力量□ また及ぶ人なし 聞及より□撲は上手也けり 名人なり

実平が十五若くんば いでゝ取べきに 何を申も老人なりとぞ言ひ

ける 股野は元来放埒の法も□もなき□忽の人にて 少しも不苦

土肥殿 御□□□ 一番可仕と申ける 実平大に驚き □□□て兎

角之詞もなく 近比以外の 笑止千万也 伊豆相模<sup>様</sup>の面々 此面目

の恥辱は伊東三浦に止りたりと 私語□□ 然りといへ共 誰彼と

言ふ共 中々以叶べきや 今は河津三郎祐泰より外 股野に勝べき

人は無之と 興も静りける 去程に 河津三郎は常々隠□柔和に

年も三十二歳の壮年 男に盛り 大力量の人なり □□人徳の河津

なれば 出て角力の勝負せよといふ人 更になかりけり 河津は利

発の人にて 此躰を見て 残念之事 土肥二郎□我□縁者也 恥

をあたゑんも残念也 又 股野□□□の荒言を聞のがするも本意な

しと 土肥次郎□側に依り 今日の酒宴之亭主□□伊東なり 客人

の面々に不興を招候 不苦ば出て 一番仕らんやと申さるゝ 土肥

も心底に合点して 今日の股野が詞を奇怪と思ふらめ 此上 河津

が負は はぢの上恥なりと 土肥も胸打騒ぎて とかく詞もなかり

けり 父の伊東祐親是を聞 いしくも被申たり 河津負ても不苦

恥にもあらず 出て仕れと□たり 祐泰 畏て候と狩衣ぬぎて 小

袖じゅばん之上に 手綱二筋 四重にまわして強くしめて つと出

て 股野殿之御有様 申も中々余りあり 河津は御相手に不足可思

けり 此時のはたらき 今の世にも残り 行司相撲は 高□□は制  
すれ共はるなりとは□□ 此時の勝負を手本にする也 其内 藍沢  
は相撲上手にて 下<sup>た</sup>手に入 前付にはつしと付たり 瀧口は大  
力にて 上より強く□し付るを 藍沢□□□肩をぬいたり 瀧口は  
自分の力に余りて 大地に□□たり 是 今の世の肩すかしなり  
芝居の面々一□に 藍沢勝たり 取たりと 大□□□□□ 藍沢  
は本望を達したり いか程まけても苦しからず □続て三番勝たり  
三番□□て し込んとする時に 海老名の行司 惣<sup>じ</sup>じて相撲は三番  
一つがいなり 名乗□<sup>べ</sup>しとて 東の方屋にて 三番の相撲藍沢十  
郎重治と 大音に呼出 時には木下の小五郎おどり出 荒□あり  
今壹番と所望する 藍沢は本望を達したり 名乗□付たりとは い  
か程まけても苦しからずと立戻り 行司合<sup>あ</sup>せたり 然<sup>さ</sup>ども 前の相  
撲につかれたり 木下は□□□也 また 坂東に隠れなき手とりの

ものにて 引廻して藍沢を投出したり □□に若殿原を続て投げ  
二<sup>つ</sup>つがい□合 六番迄こそ勝たり□□ 此時 面々出兼たり  
本間□□□□近はいで、 力は強し 相撲は上手也 出入までに九  
番見事に勝て 扱<sup>あ</sup>もとり足らず 相手ほしやと土俵に腰うちかけて  
人もなげにぞ居たりける時 股野五郎景久 静にいでたり 誠に骨  
□荒く 松の木の小ちかく 惣<sup>じ</sup>方に□は□て 修羅王 夜叉のごとく  
扱<sup>あ</sup>も兎□の力士哉と ほめぬ人こそなかりける 然も 相撲も  
上手也 本間を始として 前後十番見事に勝て 今はいづる相手も  
なかりけり 時に股野大音あげて 相撲は是迄にて□□たるや 相  
手なくんば 股野こそ関東随一の関也 後日に辞論不可有とぞ呼り  
ける 若殿原 是を聞 大に腹を立 扱<sup>あ</sup>々 憎き股野が荒言かな  
関東一の名乗有べき□にあらず 其俣聞捨にすべきやと騒ぎ立て  
あますまじと 軍の虎□□如く片はし□ 裸になりて数十人ならび

果なり 戦場にて敵を射落し 太刀打 □□□の力量にても 二の

矢を射□□□こそなければ 憚もなき力自慢は 近比もつて聞兼たり

といふ 瀧口大音声に 十郎殿と組て 首を取か とらるゝか 藍

沢□□□相撲□也 と狩衣ぬぎく□り出けり 藍沢十郎重治 こ

らへ兼てつといで 腕の続んほど 命限り也 海老名殿 扇を入て

合せ給へと 立たたがる 海老名源三 大におどろき 走り出て

相撲は時の興也 口論は□の外也と 双方を静る 兎角 相撲は小

相撲より取□こそ面白候 海老名が行司可仕と 相撲□そは始りけ

る

# 河津 股野相撲之事

海老名源三 狩装束にて扇を持 場中□□て行司する 藍沢重真

瀧口家俊 両方立あひ 声をかけ 双方突合たるが 指込て 既に

四つ手経たりけり 然に 瀧口 上ハ手にて□□に渡して かの

十郎□場中へ投たり 其時 兄の藍沢□郎重光 帯引ちぎり裸にな

り おどり出て 手合の扇を入かと□□□□ 胸足を一つ三つ突立

たり 四郎家俊は は□□□□と□□けり 終に人□□ね込き

たり □□の□□も つきはねの手にて残りしは 此時の脚□を證

拠とするなり 時に 兄の瀧口三郎経俊は力が自慢なり 相とり出

て 片□もたらぬ様引廻して 物の見事に投出したり 藍沢十郎重

治は弟兩人を投られて 安からざることにおもひて また 相手に

は望処の幸也 兼ての荒言を胸に□ち 袴の紐をとく間もなく引切

て 相とりいでの 海老名殿へ 合せ給へといふ 源三立いでゝ

勝負といふて 扇を入たる時に 藍沢は□□の□を握りて 瀧口が

顔 小髻の処をはつたりける 瀧口も手をあげ 十郎が面をはる

相互にまけじおとらじと はつ□りけり 中々 相撲□へたり

り 土肥弥太郎は 曾我十郎 五郎には伯母智なり 此故に取持分  
なり

時に 土肥次郎申さるゝは 大場殿 海老名殿 兩人の内より吞  
で 若殿原へさし給へ 伊東の肴哉 出候はんと申されける 時に

海老名源三心得 一盃吞で 藍沢之四郎にさす 藍沢重貞 一盃吞で

土肥次郎に指 時に源三申□ 若殿原の中に肴する人なきや 瀧口

殿と 尋けり 是は須藤刑部丞が子にして 大力の若者也 然所に

何方よりか 大熊手負て走り来れり 滝口経俊屹と見て 弓矢押取

引詰て放ちたり 跡枝股にはつしと立 事共せず 熊は滝口に向□

来る 経俊二の矢を放に 目当不違 月の輪論に的中たり 熊は倒る

ゝ 経俊走寄て引寄 ゑいやと打かつぎて来り 土肥殿に御肴を奉

るといふ 諸人舌をふるう 土肥次郎大きにかんじて 天晴兵かな

能き若者哉と 父の刑部俊綱にもおとりはせざりけると 誉たりけ

る 滝口若もの也 悦て□□ 業として 弥譽らるべしと四方を見  
廻しけるが 地□三尺ばかり出たる岩石あり さつゝと立より□

眼□の目障りに□□ 片手にてはなせば□□ 谷へどふと落□□

て 小池がごとくに成 誠に大力量の人とこそみへにける 海老名

源三手を打て 瀧口殿は 関東は□におゐてたぐいはあらじとほめ

にけり 源三重ねて言は 某など□ 若盛りには 獵□の□りには

相撲をとりて 力□□□などしたり 各にも相撲を取て見給へと

自分のすきに任せて所望する 若殿原みなく酒に酔勞れ この慰

□□とい□□□る 其時 土肥二郎被申けるは 瀧口経俊と藍沢四

郎 年来□相応なり 一番取り給へと也 時に 瀧口 藍沢こそ聞

にくかれと 東国におゐて力量強き輩 出給へ 只今藍沢殿の御相

手にはちとあまり也 仕□と申ける 藍沢十郎大に怒り 関東の□

侍いでゝ 瀧口の荒言を押給わずや 凡力のじまんする人は凡下の

工藤祐経が臣八幡三郎 大見の小藤太兩人 祐経が内意により 日頃恨みの矢にて 河津を討留め落すべしと忍び出る 扱もむざんの大悪人共成り 多くの列そつの内に打紛れて窺へども 伊東は大名也 又 河津は分別の目早なれば たやすく近く様はなかりけり

### 狩場酒宴之事

安元貳年十月九日 早朝より打立 山林幽谷にわけ入て 鹿 猿 熊 大狼 狐狸 雉子 兎に至て 弓勢強若殿ばら 矢先こまやかに射留<sup>トメ</sup> 切留 組とめ働き 目を驚す斗也 列卒 山谷に 岩窟<sup>トキ</sup> 岩窟<sup>トキ</sup> 岩根をたき 險阻を渡り 盤石を打立く して 岩窟<sup>トキ</sup> 面々 得物広大に 日の暮れ 夜の明るをも知ず 狩立る山々は柏峠 熊倉谷 萩ヶ窪 椎木沢 長倉 詰<sup>ル</sup>所は赤沢山と図り 今は人馬もつかれたりとて 面々 飯の小や<sup>\*</sup>に入 休足し

て 芝居の酒盛こそ始りける 所 赤沢山の柏峠に諸家の幕谷岑に打かゝりや 四方に打廻して 伊東が饗応誠に美を尽し 両三日の労を晴す 第一の座上は 老躰にて土肥次郎実平 大場平太景義 海老名源三 此人々にて 若殿原は次第の打込に 酒宴最中也 此頃の得物 猪狼を取出して 慰之手柄の評判 誰かれと物語り

己後に古老の面々 土肥 大場などは保元平治の軍物語 数刻に及 諸人勇気を励さす 然る所に 伊東家に伝はりたる次郎員とて 大 き成あわびの貝の盃を持出たり 瓢 まん盃入也<sup>足は小升とて まんはい入</sup> 然れば 案ずるに今の九合入なり 此盃をめぐらすに 扱 ひたる上戸かな 二盃を辞する人無之とかや ときに土肥次郎被申けるは 如何に面々 此度の遊 我等に於て同然悦也と か様に被申ける子細 有之な

実平が嫡子土肥太郎は 河津三郎が妹婿な 然ば 近き縁者な

国侍立合せ 頼朝慰の為なりといふ 大成僻事也 頼朝流人の事

常に不自由に居給ふ 国侍共 いかにか程の詰□有べきいわれなし

また一説には 相模の住人大場の平太景義ふくろ島人は横嶋平權頭と号ス 一家他門

の面々寄合□ 大勢ひ伊東次郎が館へ押かけたとのこと 是異説

也 かゝる大儀の饗応 何とて不意になるべきや 此事は兼て伊東

□催したる奔走に有る也 頃は安元二年九月 伊東次郎祐親は嫡

子河津三郎祐泰と二男伊東九郎祐清を近付て 扱も当春 工藤左衛

門横道の訴に付て 上洛公事に及び 此時に 親類中 或は相模の

国の他家他門之面々 京□迄尋見給ひて 祐経非分之□と国人

の訴へ有が 此故に□我等が申条正道に極れり 然に□伊豆相模

の諸大名中 此度之二□報志 これなくんば相済まじく候也 月見

花見の節にもあらず 又は狩場に寄て夥敷饗応の用意いたし 宇佐

美 久津美 舟木より究竟の列卒貳千を用意し 来ル十月十七日

伊東に来ルもの□有也 奥野のの狩を一催し也と 廻文を順達しけ

る 人々には 三浦 大場 土肥 土屋 北条 天野 長尾 渋谷

永江 波多野 瀧口 海老名 萩野 愛沢 諸家一家中をも可□

召連との申条也 伊豆相模の国侍 是は興有慰みならんと 不残善

美を尽して 伊豆へ集りけり か様之饗応□□あり 流人右兵衛佐

殿も何とて可残すやと 上座に招き奉り 饗応随分之馳走也 頼朝

此座□は出給へども 狩場□は堅く辞退し給へり 子細は此狩□

希代の狩倉也 後日之評判とやかく有の時に 平家の後聞身の為如タメ

何と 頼朝は出給はず 此時に 残念大に羨敷思ひ給へり 此故□

統之の□後 不二之牧狩は思ひ立たり かくて十月九日狩場に出立

列卒貳千人 土肥 土屋 北条 大場 股野 長尾 永江 藍沢

海老名 萩野 竹下 矢木 本間 渋谷を始として 一類不残 伊

豆相模の小侍迄 前代未聞の狩倉と馳集る かゝる時節を幸ひに



りを含み 河津三郎を討てなきものにして 其家督論に不及 我領  
知に可成と 悪念深く思立たりけるとかや

曾我根元評判大全 卷之二

本章

伊東次郎祐親 河津三郎祐泰 公事勝利 東国伊豆□帰り 本意

を達し 一類他門饗応之事あり 此節 奥野に追鳥狩山野 悉く三

日三夜之内 面々之的道□□重累□ 酒宴芝居の興行有て 殿原相

撲始めり 若殿原勇力を争ひて 勝負まちく也 然る所へ 大場

の平太が弟に股野五郎景久 廿一番の番勝して 勢ひたけし 河津

三郎祐泰□□万 其上相撲は曾て不好 只寛仁の人なり なれ共

舅土肥次郎実平に指詰て 股野に所望する 此故に 一族の面目也

とて 河津出て股野と勝負あり 三番迄河津勝たり 天晴坂東一と

ほめたり 漸日も暮に及故に 各伊東が館へ帰り趣の時 大勢ひ美  
麗に拵へ立て 馬をのりつれける 天晴古今無双の興行也

昔書に曰 当前の利は不可思 只後度の利を可思との事 誠なる

哉 此度奥野、狩は□今希有事なり 此故 流人右兵衛佐頼朝に慰

に出給へとすゝめ 伊東が館迄□出給へども 頼朝思慮深く 夥敷

催し也 以後風説有て 都にて 平家の評判に万一よろしからざる

噂有之時は 今此上の難儀と差扣給へり 誠に大成幸也 此度の沙

汰 平家の後聞 頼朝は隠□にして 立交らざるとの事神妙也とて

何の子細も是なし 万一出給□□ 越度なるべきの処 遠慮有し事

のふかゝりける事 尤の事也

奥野の狝催之事

伊豆国奥野、狩之事 色々様々の評論あり 一説には伊豆相模の

非□ 対決すべしとて 訴状を認奉り 頭へ願上たり 小松内府御

覧ありて 不思議之至也とて 急ぎ伊東次郎祐親が嫡子河津三郎祐

泰を被召ける かくて伊豆にて 祐親驚 □上京に及れり

伊東次郎 工藤祐経と公事 伊藤勝利之事

伊藤次郎祐親 嫡子河津三郎祐泰 □ 京都より御召状来り 祐経

が願ひに依て □此故に安元二年四月 伊豆を発足して上洛す 伊

豆相模に隠れなき国侍□伝 河津嫡流□て 本領疑なし 工藤非法

の□ 国侍も右の證據に立べしとて 皆々出立す也 誠恐謹言

安元二年四月

其時に祐親申は 抑 祐経と某が祖父寂連入道 子供四人の内

嫡子祐家□某が父 四男 祐経が父なり 然る所に 寂連末期に及

で 祐継に遺言申候は 嫡孫祐親幼少なるに依て 汝に家督を譲な

り 汝□祐親□子として 汝が家督を可相譲也 依之 祐継も父

の命を不違 某に相譲り申たり 然るに祐経は幼少之時故 此仰を

不知して 只某が掠奪し□ると存違ひて候ら □ 祐経に御暇給り

伊豆下向仕候て 一庄を□あたへ可申と兼て存候所に □□の

仕合 祐経□天魔の入来ると見へ候と申上 □ 伊豆相模の国侍

大勢□出て 伊東が申条明白也 河津嫡子之家紛なきの条 国人證

拠に立申との□之願ひ也 小松の内府被聞召 伊東次郎□申条勿

論□也 寂連存命之内 嫡子早世 其子嫡孫幼少□ 二男に家

督を譲り 嫡孫を養育し 其家督を嗣がする条 常道にして古例多

し 然らば 本領是迄の通 伊東次郎全く領して 河津の三郎祐泰

相続にたつべし 其内一家の事 又聳也 祐経和順之上 一庄は合

力すべし 以来は論論有まじと□事□れて 河津が勝利と成ける

工藤は 此一庄は望に非ずとて不請 此已後 祐経大きに内心に憤

相渡旨 河津次郎祐親に遺言して 所領をあづけ置申候処十余歳

以来 祐親恣に押領せしむに依て 祐経流浪の身となり候 量

御裁許を請 全安堵の御下知を蒙らんと欲す かの断以乃

曾我 従弟にて有 之望緒親敷 元来 河津次郎に本

領なれば 祐経 望にも有間敷事也 工藤も当時 事也

に出て随一之もの也 武勇之志も有侍 哥 管弦 万端形のごとし

小松殿之出頭にて 工藤一鷹祐経とて武者所也 何に不足も有間敷

に 禍ひは必女之心より起る事也 祐経 今京家之 人を以 是

日本一之事なりと 老母之方より被申越候は 抑 今伊東次郎祐親

之領知は 元来貴殿父 四郎祐継之領也けるを 金石丸幼年のうち

十五歳迄とて預 知行なり 知行と言ふは 宇佐美 久津美 河津

舟木 伊東五ヶ庄 伊豆の国の旗頭は祐経 持分たるべき事也 是

非に京家の御沙汰を請 本領を取返し給へと ひとと催促有にけり

祐経も当時京家の出頭也 其上 祐経が学問の師匠 文章の博士藤

原光経かたへ毎日通ふゆへ 此事を語り遣すは 光経委細の事は曾

て不知 げにや 伊東次郎は以の外の悪逆の人也 六波羅へ訴へ給

へ 公務の裁許に及ぶ時 光経可様に取繕ひ 可申相談の張

本人にして評定す 此故に 祐経はとかくに祐親を京都へ呼せて

是非の決断を願ひて 祐親を追倒して 所領も安堵すべしと 日夜

思慮をめぐらしけるが 先 公務より先に伊東が心底を 視ん

と 祐経 代官を して伊東に申は 亡父祐継が遺領宇佐美 久

津美 舟木 不残本主に返し給へと申送りける 此時 祐親大きに

立腹して 近比心 ざる祐経が心底哉 それ当国は古来より 代

祐親迄 嫡子相伝之領地也 河津次郎が外に他領 し 其使永く

逗留せば 可打殺 旬りける程に 急ぎ逃帰りて 此よしを申 祐

経残念の事 と思ひて 此上は伊東父子を京都に呼よせ 六波羅是

## 河津次郎祐親本領安堵之事

去程に河津次郎祐親は 年来本領を伯父に被奪 □ならずも河津

一庄にて日を暮けるに 工藤四郎祐繼死去して 其家督□□ 本領

相続に急ぎ伊東に引移 屋形を普請して 元来武勇知謀正しき武将

故 大に家富栄た□□ 年月過て 金石丸成長し 十五歳□□

程に 祐親則養子にして 烏帽子を着せ 工藤太郎祐経と号せり

殊□外利発也ける故に □都に召出されて 平家六波羅殿に推参し

て 本町の武者所 小松内府重盛公の御近習に奉□□ 祐経は伊豆

国に□頭武者所給はり 美目 今の世に繁栄也 其上に 祐経は伊

東次郎が<sup>・</sup>聳にて まんこうと言へる娘を妻□□たり 此筋目を□て

曾我兄弟之仇□□ 伯母□也 犬房丸は従弟也

□此度伊豆相続に 諸侍一同に伊東を最肩するは 元来 四郎祐

繼非法にして家督に居る 嫡流は河津也と思ふ処に また河津三郎

祐泰 不思議に仁徳の人にして 愛敬心有 大力量関東一の若もの

にて 諸人 河津三郎を入魂に思ふ 此故に 此度 土肥 土屋

三浦 岡崎 大場 海老名 藍沢の面々 皆々□て上洛せり

伊東 河津上洛の砌□有 工藤□□反対□□の其非法嚴そか也

六波羅御館に評定の御台を構へ 小松内大臣重盛公 出□□談の諸

一門 譜代の諸士 並々 左右に伺候する 裁判役 肥後守貞□□

上総介忠清 越中の禪司盛俊 飛驒判官□□ 四人宿老列座せり

伊東次郎父子 工藤祐経 両方に立出たり 誠に晴がましき体也

其時に奉行頭人 訴訟状ひらきて読

伊豆国住人 工藤一藤藤原祐経 謹□訴申条 早欲蒙御裁許意趣

者 伊豆の国宇佐美 久津美 河津 舟木 伊東の庄の事 右仰□□

□領は祖父寂連入道より三代相伝の地也 然るに 某が父工藤瀧口

の祐繼末期に及で 祐経幼年□に九歳の間 十五歳に至ば 無妨可

の悪心古今に同じ。女心に我子を家督に立度 嫡子伊東太郎祐家

に毒<sup>□</sup>しけり<sup>祐親の父なり</sup> 是は悪念 二男 加賀国林が家を相続す 三男

は狩野之家を継ぐ。然る上は 太郎<sup>□</sup> 我子の祐継家督たる<sup>□</sup>

<sup>□</sup>との思案にて 如此はなしたり 悪逆此上に 寂連有<sup>□</sup>き<sup>□</sup>也

かくて年月過 四郎家継入道病死するに 末期に及ぶの当妻 水草

の愛におぼれ 甚愛すぎ 本意を背たる遺言たり 嫡子祐家は早世

せり 嫡孫の事なり 河津に居住する二郎祐親に家督を譲るべ<sup>□</sup>れ

共 幼年の事なれば 四男祐継を家督に定め 所領不残相譲也 嫡

孫なれば 又 河津二郎祐親を祐継が養子にして 家督を可渡と遺

言をし<sup>□</sup> 是子孫に仇を結の根元なり たとへ幼<sup>□</sup> 河津二

郎に家督を譲り 狩野介義光を後見にす<sup>起</sup>へ置こそ道筋也 <sup>□</sup>は 祐

継家督を相続して 祐親は河津の一庄を合力して 逆成暮しにて

常々不和也 此節より河津を領しける程に 河津次郎祐親と名乗け

り

#### 工藤四郎祐継死去之事

然るに 四郎祐継 久寿<sup>□</sup>年之比 八月十六日に大蔵が谷で 悪

源太義平の手に<sup>□</sup>し合戦有し時 重手を負 古郷伊東へかへり 今

は命も危くなりた<sup>□</sup><sup>□</sup><sup>□</sup> 日比は辛く当ると言へども 父の遺<sup>□</sup><sup>□</sup>

<sup>□</sup> また国中<sup>□</sup>も知る所<sup>□</sup> 河津次郎は嫡孫なり 其上 我子金石

丸幼年<sup>□</sup> 漸々九歳にして相続<sup>□</sup><sup>□</sup> 此ゆへに 河津次郎を呼んで

貴殿は元来嫡家督におれり 今最期に及 本領不残返し申也 また

貴殿の養子斗は我子の金石丸を立給へといゝ 死去せり 其時<sup>□</sup>金

石丸九歳也 いま成人して 工藤左衛門尉祐経也 元来より河津本

領<sup>□</sup><sup>□</sup><sup>□</sup> 譜代の家人迄 皆万歳を<sup>□</sup>栄也

に仕へて 近習武者の一臈と成 公務の宜しきに任せて 所領の公

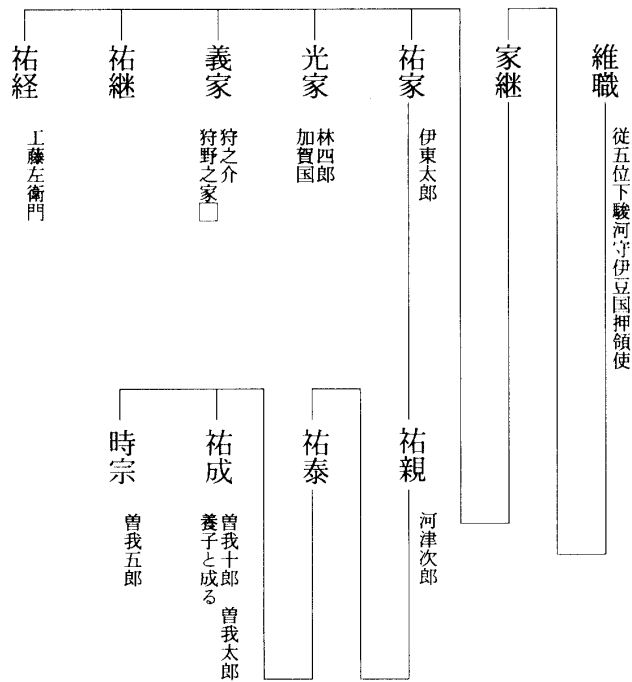
事対決に及ぶの所 河津次郎祐親<sup>経</sup> 嫡子河津三郎祐泰 元来嫡子の

筋目故 小松内府重盛 裁別有之 公事は河津が勝ちにけり 此故

に工藤大ひに怒り 河津父子を意恨に深く含みけるなり

### 家系図

鎌足公六代後胤



### 工藤由緒之事

曾我十郎祐成 同五郎時宗は 工藤左衛門祐経とは別て親しき一

類也 然に年来憤りをふくみ 仇を結ぶ子細を尋るに 唯一朝夕の

事に非ず 其源遠くして 五代の先祖 久津美四郎太夫家継より起

れり 家継武勇の名は有といへども 好之法にあらざる殿也 子細

は家継の妻死去せり 勿論 嫡子祐家出生の母なり 此後に又入

田の庄司八郎<sup>□□□□</sup>と<sup>□□□□</sup>をもらひて妻女とせり 此女房もまた

死去せり 然る所に 家基<sup>□□</sup>娘に<sup>□□</sup>とて貞女の聞へ有 然ども是

はいわば家継が為に継娘也 <sup>□□□□</sup>のこなし<sup>□□</sup> 家継に養はれて居

たりたればなりける程に 忍びて恋<sup>□□□□</sup>通ひして 無程男子を産り

工藤瀧口祐継とて 是工藤祐経の父也 此四郎太夫家継は 男子四

人有 嫡子は伊東太郎祐家 二男は加賀国 林四郎光家<sup>林之家へ養子 家督を継</sup>

三男は狩野介義光<sup>狩野介養子 家督を継</sup> 四男は瀧口祐継<sup>経</sup>なり 然る所<sup>□□</sup> 母

舟木 河津 又勢 河望期 長野 都合式万丁の大名當時之二千  
万石程なり 富

貴繁榮にして しかも 御大将家の出頭にて中老職也 曾我兄弟は

貧窮の浪人なり 只式人 朝夕の渡世に不自由□□の内に父の仇を

報ず。 是至て珍成事也 单身にして 今の式拾万石の大名を可討取

様なし 又 諸親類大勢有之といへども 常に介抱に預□ず。 鎌倉

殿より 入魂の尋有之といへども 曾て不応事 願□不申 一筋に

父の讎を報ずる所に 死て名を万代に□る 然るに 此始終人口に

渡り 其実儀共を誤り 至孝の曾我 虚名の説を悲しみ 書々を考

へて評判大全と号するもの也

田丸常山□作

曾我根元評判大全 卷之壹

本章 曾我物語を□していふ

曾我十郎祐成 同五郎時宗 建久四年五月廿八日 富士野にて

父の敵工藤左衛門尉祐経を討て 其功日滅にふるゝ 其乱着を尋る

に 先祖は大職冠鎌足公十六代の後胤 従五位下駿河守藤原の維職

を 伊豆国の押領使に補せられ 其嫡工藤太夫家継祐家 宇佐美 久津

美 河津□を領せり 嫡子工藤太郎祐家 早世せり 其子 嫡孫河

津次郎祐親 幼年之故也 依之 家継入道寂連 末期に 二男工藤

次郎祐継家に家督をゆづり □嫡孫河津成長之時 家督可相渡と遺言

して死去畢△おはん▽ 此已後に祐継死去之時 父の遺言あり 又 我子幼少

なり 此故に 河津次郎祐親に家督をゆづりけり 我子金石丸はま

た祐親の養子に頼入之旨を申て死去せり この金石丸 成長して工

藤祐経也 か様□筋目なれば。 当前の利は祐経 又 祐親入道之養

子に可成筈なりといへども 元来嫡流は河津にて 他之論は有間敷

家督の家筋なり 然るに 工藤祐経成長して 京都□□ 小松殿

〔行数〕九行。

〔印記〕各冊に「島津文庫之印」あり。

〔表紙〕六冊目表にだけ藍色原表紙が残っている。題簽は無く、表紙に直接「曾我根元評判大全 一至三」と墨書してある。他の冊はすべて白の保護表紙のみ。

〔著者〕田丸常山。

本書は、序にある通り「曾我兄弟」の「至孝」の「始終」が「書々に誤り 多く其実儀隠るゝ」ことを「悲し」んだ常山が「曾我物語根元記 勲功記 鎌倉実録の評判をきわめ」「書々を考へて」記したものである。今回は、その「卷之壹」と「卷之二」を翻刻した。

## 凡 例

本文は底本通りに翻刻することを主眼としたが、読解の便をはかって次の処置を施した。

- 1 句読点に相当するところは一字あきとした。
- 2 仮名は現行の字体に統一した。
- 3 片仮名「ハ」「ミ」「ニ」は捨仮名の場合を除いて平仮名扱いとした。
- 4 仮名の清濁については、底本にない濁点を適宜補い、補った文字の右に・を付した。
- 5 漢字は通行字体を用いたが、慣用字は底本のままとした。
- 6 反復記号は底本のままとした。
- 7 明白な誤り及びわかりにくい宛て字は適宜改め、底本の文字を振り仮名の位置に残した。
- 8 底本に振り仮名がある場合は、その振り仮名にハ／＼を付し

て7と区別した。

- 9 損傷等により判読不能の部分は、字数のわかる場合には字数分の□で、字数のわからない場合には□で示した。

## 翻 刻

曾我根元評判大全 卷之壹

### 序

抑 曾我兄弟 祐成時宗 父の仇を復する事遅緩□して 久敷待

といへども 其時を不失 其隙を伺ふに 空虚に乗じて单身にして

あたを報じ 俱に天を不戴志を達し 誉を後世に残し置る事 可惜

可悲 然りといへども 此始終書々に誤り 多く其実儀隠るゝ 依

之 曾我物語根元記 勲功記 鎌倉実録の評判をきわめ 根元大全

と号するものなり

抑 日本に古今□□あたを報ずるもの多しといへども 曾我兄

弟程功□□の□節成無之 工藤左衛門祐経は宇佐美 久津美



曾我按元評明大全卷之五

序

杯看朝（一）身宿歲時未父の魂と儼たる父を遙く  
 少安撫といふも何と目大に治と知れ  
 康新より常規りてありと教へ但ふたを不意を  
 送し若くは世を強へるも及て皆悲切なりと  
 此雖故書より誤り多くて莫城瀝々然と  
 物に徳元就勤記に徳元を治て評判とさるる  
 徳元大令なりと云ふものなり



曾永根 元 評判 六 金卷 七 卷

奉章 考校治之

爲家子修厥嗣志守而志遠分年大司亦曰要  
 際々々人の歌を爲す處を修めて討つて相見ぬ  
 始々々々此を以て討つて此を以て大徳冠賜ふ  
 六代の隆興後其修下修治も其修力修職も修  
 國以神順爲す補々々々其修之有るを修家す  
 其修人は其修の修とて修なり修之を修を修  
 其修也りも其修の修なり其修初年其修

原稿本を二家蔵し、應仁將軍が兵を動か  
 したとき、竹敵は龍作一隊を擁護し、活況大  
 げをうけ、天下風靡し、龍作は之をいかに擁護  
 したか、小司和をいかに擁護したか、時主人と  
 世間人なり

另找很元祥判

# 翻刻『曾我根元評判大全』 (卷之壹、卷之二)

後藤多津子  
田尻龍正

## まえがき

田尻 龍正

数年前、その当時県立図書館の郷土資料室主幹だった岩切悦子氏から「曾我根元評判大全」十九巻が佐土原 島津文庫にふくまれていて、県立図書館蔵書になっているが、『国書総目録』にも載っていない。いわゆる『曾我物語』とも目次に相違がある。その序文によれば田丸常山という人が書いたことになっている。『曾我物語』の異本研究の資料にもなるのではなからうか、翻読してみてほしい旨の依頼を受けていた。短大勤めの校務に時間をとられて親しく調査する余裕を持てなかったので、本学助教授 後藤多津子氏を労わせ、一年を経て、ひとまず陽の目をみることになった。ここに記してその労をねぎらい、兼ねて同好研究者に資料を供して示教を待つものである。併せてこの仕事を与えられた右岩切悦子氏に誌上を借りて感謝申し上げる。

## 書 誌

〔底本〕宮崎県立図書館蔵。図書番号九一三四・S二・一〇六。虫喰いが甚だしく、裏打ちして補修製本されている。

〔寸法〕縦二五・八糎。横一七・七糎。

〔冊数・丁数〕六冊。三一九丁。

第一冊 四〇丁 (卷之拾七〇一四丁、卷之拾八〇一三丁、卷之拾九〇一三丁)

第二冊 六〇丁 (卷之四〇二二丁、卷之五〇二〇丁、卷之六〇一九丁)

第三冊 六四丁 (卷之七〇二五丁、卷之八〇一七丁、卷之九〇二二丁)

第四冊 五〇丁 (卷之十〇一九丁、卷之拾壹〇一五丁、卷之拾貳〇一六丁)

第五冊 五八丁 (卷之拾三〇一四丁、卷之拾四〇一七丁、卷之拾五〇一五丁、卷之拾六〇一二丁)

第六冊 四七丁 (卷之壹〇一四丁、卷之二〇一六丁、卷之三〇一七丁)